

荘園史研究会編

## 『荘園史研究ハンドブック』

東京堂出版 一〇一三・一〇刊  
A5 二五六頁 二八〇〇円

奈良時代から戦国時代にかけて存在した荘園の理解は一九九〇年代後半以降大きく変化した。しかし、それに対応した荘園の概説書は見られない。本書は以上のような現状を踏まえて、新しい研究動向を取り入れた荘園の概説を試みたものである。

その構成は基本的には各時代ごとの荘園を論じる構成となっており、第1章で八・九世紀の古代荘園、第2章で一〇・一一世紀の撰関期の荘園、第3章で院政期における中世荘園の成立、第4章で鎌倉期における中世荘園の確立、第6章では南北朝期から戦国期の荘園について論じられている。また第5章では、中世荘園の内部構造に関して論じており、時代ごとの検討ではふれることのできない荘園の基本構造が示されている。

各章は荘園史研究会のメンバーが分担で執筆しており、それぞれの章でメンバーの個性が垣間見える記述も見られるが、本書の「はじめに」でも示されているように、各時代の社会や土地制度全体のなかで荘園がどのように位置づけられているのか、という点を共通の視覚としており、本書を通じて荘園史の全容を効率よく理解できるようになっている。

また各章末には「コラム」として近年分析の進んでいる荘園絵

図の解説が付されているほか、基本的な用語の解説も付されている。さらに巻末には「荘園史の名著」として荘園史研究に関する基本文献として四七冊を取り上げ、その内容を紹介している。このような構成は荘園史研究の初学者に配慮したものと言えよう。

中世史を志す者にとって荘園の問題は避けて通ることができない。評者も大学四年生のとき中世史を学ぶ決心を固めたが、その際荘園についての理解を深めたいと思い、安田元久『日本史小百科 荘園』を読んだ。そして、その後大学院に入学してからも荘園に関する史料を読むときには同書を何度も見返したおぼえがある。本書も用語解説や名著紹介に見られるように、一度読むだけでなく初学者が史料を読んだり、先行研究にあたったりする際に繰り返し参照できるような配慮が随所になされている。そのような点で本書は荘園史研究・中世史研究の入門書・手引書として初学者必携の一冊であると言えよう。

また概説書としての本書の強みはやはり通史的な記述形式をとっている点である。現在中世後期の寺院を主たる研究対象としている評者は、当該期の荘園に関する研究までは目が届いても、恥ずかしい話ながら院政期さらには古代荘園に関する研究動向にまではなかなかついていけない。しかしながら本書を通読することであらためて古代から中世社会への推移を理解し直す機会を得ることができたように思える。その意味ではすでに古代史・中世史研究の道に進んでいる方々にとっても本書は通読する価値があるのではないか。

(西尾知己)